●稲垣足穂と「ヒコーキ野郎たち」

稲垣足穂は大阪市船場の歯科医の家に生まれ、明治 40（1907）年に祖父母のいる兵庫県明石へと移り住み、神戸で育ちました。父親に連れて行かれ須磨海岸で見たアメリカの飛行家による水上ショーに魅せられた稲垣は、大正 3（1914）年に入学した関西学院普通学部（旧制中学）で「神戸飛行研究会」を設立、同人誌『飛行画報』を創刊します。飛行家に憧れ、羽田の日本飛行学校第 1 期生に応募しますが、近視のため不合格。

日本飛行学校周辺図（大正初期）

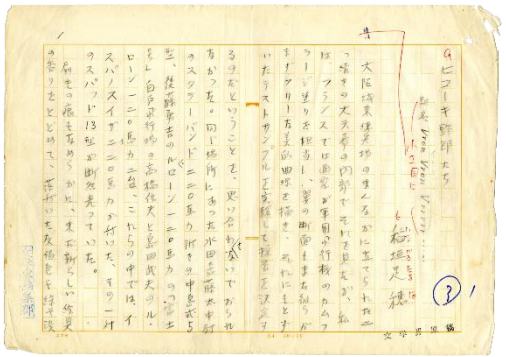
大正 8 年に関西学院卒業後、仲間たちと複葉機を購入し、鳴尾競馬場（現兵庫県西宮市）で約 3 ヵ月かけて組み立てます。テスト始動では騒音と振動で近所から苦情が出て警官も駆け付ける騒ぎとなりますが、離陸できず失敗しました。

大正 10 年、「一千一秒物語」の原稿を佐藤春夫に送り、認められて師事。翌年『婦人公論』に「チョコレート」「星を造る人」を発表、翌々年には佐藤春夫が序を付し、『一千一秒物語』を刊行します。この年の 12 月、大坂の新聞社が女学生を対象に「代表的モダンボーイ五名」を選出した際には、その一人として選ばれる程、人気がありました。

佐藤春夫に認められ、作品にも恵まれて、作家として順調な滑り出しをした稲垣ですが、アルコールとニコチンに侵され一時期創作不能に陥ります。昭和 11（1936）年に上京。関西学院で 1 級下にいた衣巻省三の馬込の家に転がり込み、酒浸りの日々を送りました。この頃、室生犀星宅気付で郵便物を受け取っていましたが、その犀星に酒癖の悪さや居候生活について説教され、泣き出したというエピソードも残されています。

昭和 25 年、篠原志代と結婚、京都で暮らし、これまでの著作の改稿などに勤しみます。昭和 43 年には『少年愛の美学』で第 1 回日本文学大賞を受賞。翌年から『稲垣足穂大全』全 6 巻が刊行され、稲垣の再評価、ブームが起きました。

稲垣の代表作のひとつ、「ヒコーキ野郎たち」は稲垣の飛行機愛にあふれたエッセイ風の作品で、鳴尾競馬場で飛行機を飛ばすために仲間と過ごした日々を描いており、昭和 3 年 11 月に『新潮』に発表されました。その後、増補を加え、複数の誌面で公表した後、『文学界』（昭和 44 年）で完成に至ります。同作では日本飛行学校の傍にあった、黒田家の鴨猟場、羽田穴守稲荷神社、神社周辺の料亭や娯楽施設のことなどにも言及されており、文学作品ながら、当時の羽田の情景を知る上では貴重な資料のひとつとなっています。


稲垣足穂自筆原稿「ヒコーキ野郎たち」（昭和 44 年）
この原稿は「文学界原稿」の印が押された「ヒコーキ野郎たち」の完成原稿です。